

昭和二十一年十月から又学校に戻ったが、翌年先生は久遠寺教学部長に任ぜられ学校は一時退職の形となった。私も亦同部録事となって宝物館運営やら、山史資料の蒐集に従事する様になって先生との交渉も深くなった。又それ以前昭和十六年秋、在満部隊在任中に、樋口法兄の覚林房転住の後を承けて端場坊住職となって居たが、先生の生家の菩提寺と云う関係も生じた。昭和廿三年二月五日の命日を期して、御存知「和田屋のいしやん」の第十三回忌を先生や樋口師等と主唱し、有縁者の参会を得て執行した、食糧困難の当時の事故毎日山仕事に通って居た銀造老人にも麦のみのおかゆを喰べさせたものだった。本年六月六日に第五回の和親会の集いに登山された十五名の諸師と共に、いし女の卅三回忌、老人の第十三回忌の追善回向を執行したが、期せずして一同から先生の追憶が語られた。先生は生へ抜き祖山出身であり、地道な勉強をされた人でもあり、生涯を通じ種々教へられるところ大であった。恩師であり、先輩であり、古き身延を語り得る先生が亡くなられたことは寂しいことである。

(昭和四十三年六月十一日記) (図書館長)

## 松木先生を偲びて

福 島 義 孝

私が祖山学院へ就任したのは、昭和七年四月であった。新学年開校日の朝、塩田義遜先生と共に身延線で登山の途

中車中で紹介されて、初対面の挨拶を交したのが、松木本興先生その人であった。折柄身延山は、桜花爛漫の好季節で、参拝者ひきも切らず、金山は活気に満ちあふれていた。

時の学院々長は、その前年法主として御晋山せられた望月日謙猊下であった。新学年開校式は大客殿に於いて挙行されたが、その日顔を揃へたのは、遠藤是妙教頭以下、塩田義遜、中条是妙、永倉唯嘉、丸山嶺孝、松木本興、望月舜勝、今村是龍、望月徳英、加藤鍊明、堀内義光（書記）等の諸先生であった。右の中遠藤、松木、加藤、堀内等の諸先生が初対面の外は、大崎時代の先輩或は後輩で、望月舜勝先生は同級で特に親しい間柄であった。松木先生は身延生れの生粋の土地ツ子で学院出身、身延山留学生として天台宗大学で台学を研修された新進の学究、又幹事という役職をも兼ね、何かにつけて学園の中心的存在であった。（あれから三十余年は夢の如くに過ぎ去ったが、その間塩田、永倉、丸山、松木、今村、加藤の諸師は既に亡き数に入り、その後相ついで就任された諸先生の中、柿沼勝孝、望月歆爾、高杉、中村等の方々も早く世を去り、当時三十一才漸く壮年の域に達していた私も、今ははや、唯碌々として老境に入りつゝあり。誠に憾無量と云うの外はない。）

当時の学院の校舎は実にひどいもので、板戸一枚隣の教室で、瘠高いN先生の講義が始まると、こちらままけずに声を張り上げないと、すっかりお隣りのペースに巻き込まれて了う始末、昨年新築された校舎の豪華さからは、想像も出来ない有様であった。又我々教師の寮としては、教頭寮の外に東溪寮（現存）の二階がこれに充当され、中条、永倉、丸山、松木、望月、福島らが入室していた。その後厚徳寮が建設され、教師寮も二棟建てられて、私どもは其処へ移転した。私はいつも松木先生と隣合せの室を頂き、かくて昭和二十年三月までの十三年間、諸先生方と寝食を共にしたのであった。或る時は食堂の爐端で論議を戦はし、又或る時は夜遅くまで痛飲したことも、忘れ難い思ひ出

である。そうした十三年という永い歳月、私の身延生活への回想のページの中、いつも何処かに位置を占め、その時その場の姿で浮んで来るのは、松木先生のあの渋いお姿であり、囁れたお声である。雄弁をもって鳴らした先生は、日常はむしろ言葉少ない方であった。余り感情を表に現はさない落付いた挙措は流石であった。私より三つ位い年長であったが、生れつき健康に恵まれておられたのか、（尤も学生の頃胸を患ったとのことであるが）、酒量も相当なもので、たばこも嗜好物だったらしく、かなり無茶をした翌朝でも、平然と朝勤の説教をやられたし、講義を休むような事はなさらなかった。それでも一度眼と肝臓をやられたとかで、かなりの期間禁酒されたことがあったのを覚えている。

戦争が次第に苛烈になり、学徒動員で学校も殆ど有名無実の状態と化し、我々教師は交代で、名古屋、横浜、平塚と各地へ学徒と共に勤労働員されるようになった。私は敗戦の二十年三月、教職を退いて自坊へ帰った。爾来二十余年、先生は祖山の学頭に榮進されて、文字通り祖山教学の重鎮となられた。多年御交誼を頂いた私どもは、陰ながら学園の隆昌と先生の御健在とを祈って止まなかった。幸いその昔、我々が衷心からの念願であった学園に豪壮な学舎が完成し、我が事の如く、喜んでいた矢先、先生は遂に病に斃られたのである。去年の春勝沼町上行寺へ、法資齋興師が車で同道して来られた時は、大分弱って居られたが、それ程とも思はず、再会を約してお別れしたのに、昨冬十二月十九日突如として遷化の悲報に接した時は、全く驚愕おく能はず、三十余年の友情を想起して感慨無量、終夜夢幻の境をさ迷ふ思ひであった。

三月八日御自坊に於ける本葬の日は、終日春雨が煙っていた。立派な後継者に恵まれ、法友、教へ子、檀信徒の哀惜の涙のうちに遷化された先生を、遙かに靈山へお送りするにふさわしい静かな初春の一日であった。

鷹取の尾根の落葉をかきわけて紅茸狩りに興じたる日よ

戦中の苛しき日々を山深く共にこもりし頃し思ほゆ

木炭の乏しき冬は焚火して暖をとりつつ論議せしかな

教へ子を厳しき戦場に送りたる夕べは爐辺に無言にて坐す

長生寺その名の如く弥栄に君こそ居ませと祈りしものを

山梨・蓮華寺住職

(一九六八、六、二〇)

## 「過渡期」の台学者に贈る

疋 田 英 肇

昭和十三年大学は卒業したけれども、師父、英恩日秀上人を喪った私は、師父の身延時代からの学友であった望月日謙法主の勧告に従ひ、同年秋僧行道場を出行すると共に日謙法主の会下に参ずる事となり、昭和十四年正月早々広島から笈を負うて身延山に登参した。柴田巖秀総務の御話では、どうやら祖山学院を専門学校に昇格するので、学校へ勤めさすのが謙上法主の真意であり、それまで且く布教師となつて「身延教報」編輯に携っている様に命ぜられ、いはゞ教員と布教師の見習いの様な形で、当時の教師寮（東溪寮）に一室を与へられて住む事になったが、それは当時学校の教務主任であり、身延山布教師の筆頭でもあった松木本興先生の指導を受けさせ様という親心ある計ひであつ